
みかんの数え歌

三沢緋夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みかんの数え歌

【Nコード】

N5226A

【作者名】

三沢緋夏

【あらすじ】

あいつの思いつきで始まった肝試し。全てはそこから始まったんだ。

ひとつやふたつはいいけれど

だから嫌だと言ったんだ。

そんなこと、したくないって言ったのに。

目の前に広がる漆黒の闇。

無音の世界。

第6感の告げた精一杯の警告を

無視した自分に後悔をする。

生を感じる恐怖心なんて捨てればよかった。

あいつを蹴り殺してでも振り切ればよかったんだ。

漆黒の闇をかすかに照らす真つ赤な月。

いつもは目を細めて眺めるそれすらが

気持ち悪い。

にやりと笑んだ少女の顔。

「なあ、肝試しやんねえか？」

全ての事の発端。それがこいつの思い付きだった。

いいね、それ。と目を輝かせるそいつらだって今の俺にとっちゃ悪魔。

真夏の蒸し暑さが嫌になつてか。

それともただの興味本位か。

「な、来るよな？」

首を振った俺の肩を掴んでにつこり笑う。手には中毒になっている火のついたタバコ。

否を唱えることは許されず

非難の言葉を唱えることも許されず

肯定の意をもつうなずき。

みつつミカンを食べ過ぎて

俺の住んでいる村には高くそびえる山がある。

その山には、決して入ってはいけないと祖母に何度も言われた。

村人は死んだらそこに行くと、昔から言われ続けているからだ。

だが、山の精に拒まれた奴は山に入ることはできずに、ふもとの雑木林でうろろするしかない。

例えばそれは罪人であったり親より先に死んだ人だったりだ。

親より先に死ぬことほど親不孝なことはない、と。

親が死に、迎えに来てくれた者だけが一緒に山に登れるとも聞いたが。

だから怨念を抱いているよくないものが多いから、と。

とにかく俺たちはその山のふもとの雑木林にいった。

先頭を威張りきって歩いているのはこんな企画をたてたあいつだ。

俺は最後尾をトボトボ歩いている。

雑木林にある小屋。

そこに一泊する。

それが今回の肝試しだ。

村で言われ続けていることを証明するために。

「あつた。小屋だ」

よつつ夜中に腹下し

小屋は思ったより広がった。

中に入りドアを閉めると真っ暗で、あいつの持ってきていた懐中電灯だけが唯一の光だった。

それを囲むようにして俺たち5人は座り込む。

「なんか薄気味悪いな、やっぱ」

うつむきながら、あいつは言った。

そんなこと言うんなら最初からしなければいいのに。

しーんとした状態が続く。

聞こえてくるのは風の音と、小屋のきしむ音。

それから俺の鼓動。

いつついつものお医者さん

突然連中の1人が頭を抱えてうずくまった。

「頭・・・いてえ・・・」

その後ろで笑っている、いるはずのないモノ。

見えなければよかったのに。

見えてしまわなければよかったのに。

恐怖で心臓につめを立てられているようだ。

「か・・・帰ろっか・・・」

恐る恐る言ったあいつの目にも、何かが見えていたのだろうか。

突然、あいつは小屋から飛び出した。
それに続くように、俺も、他の連中も小屋から逃げ出す。
途中で頭痛を訴えた奴が崩れたが誰も足を止めない。

むつつ迎えの看護婦さん

先頭を走っていたあいつがいきなり座り込んだ。
震えを止めようとせずにガチガチ鳴る口でつぶやく。
「も、もう・・・帰れない・・・帰れない・・・」
手には砕けた懐中電灯。
横にはお手玉で遊んでいる女の子。

ななつなかなか治らない

崩れるようにしゃがみこむ他の連中。
毒々しいほど赤い月だけがあたりを照らす。
女の子は楽しそうに歌う。

やっつやっぱり治らない

ザンと風が吹く。
舞う葉と砂から守るために、反射的に目をつぶる。
次にあけたときにはあいつらがいないということも知らずに。
風が吹き荒れる。

何かを訴えるかのように吹き荒れる。
その強い風の中でもはつきりききとれる女の子の声。

このつこの子はもうだめだ

風がやむ。
目を開ける。

イマスグニゲナキヤ。ハシッテ。ハシッテ。ココカラデナキヤ。

全神経がそう命令を出しているのに。
身体はぴくりとも動かない。
風がやんで、しんとなった雑木林。
やがて感じる何かの気配。
視覚でも、聴覚でも、嗅覚でもない。
第六感の感じる気配。

だから嫌だと言ったんだ。

女の子の声は脳に直接響く。
それに重ね合わせるように背後に迫る何か唇を動かす。

とおでとうとう死んじやった

（後書き）

ホラーを書くのは初めてなのでホラーになったかどうか不安でいっぱいです・・・。

ホラーを読むのが苦手なので本当に思いつきでやってしまったみたいです。

感想、評価もらえると嬉しいです。エネルギーになります。機会があればまた。三沢でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5226a/>

みかんの数え歌

2010年12月10日19時49分発行